

# エンター・ザ・シンギュラリティ 特異点への突入

翻訳： 待兼音二郎 (Ottojiro MACHIKANE)  
翻訳協力： 『エクリプス・フェイズ』日本語版翻訳チーム (EclipsePhase Japanese Translating Team)  
アナログ・ゲーム・スタディーズ (Analog Game Studies)

## エクリプス・フェイズとは

エクリプス・フェイズは“蝕の時”とも訳され、細胞がウイルスに感染してから、そのウイルスが顕在化して細胞を変質させるまでの期間を意味する。この期間中、細胞は感染しているようには見えないが、実際には感染しているのだ。

みずからを引き上げつつも蹴り落とす——そんな突拍子もないことをくり返すのも、我ら人類のひとつ覚えか。歴史上かつてないほどの発展を成し遂げながら、母なる地球を荒廃させ、各国政府を揺るがせたのも我らのしわざだ。いや、そんな騒擾<sup>そうじょう</sup>の世にあってなお、希望のきらめきはたしかにあった……ありはしたのだ。

飛躍的に進歩し続ける技術のお陰で、我々はこの太陽系の隅々にまで進出し、テラフォーミングによって新たな生活圏を創出した。肉体や精神を改良することで、病気や死からも解放された。精神のデジタル化によって不死が現実のものとなり、生身の肉体から合成義体へ、またその逆へと、<sup>リネーシング</sup>再着装をくり返すことさえすでに可能だ。さらに我々は、動物や人工知能 (AI) の知的能力も、人類に比肩するまでに向上させた。望む物すべてを分子レベルから製造する手段を得たこともあって、困窮はとうに過去の概念である。

けれども、我先に絶滅へと駆けこもうとするかのごとき人類の疾走はとどまることなく、あまつさえ機械までが我々の背中を押して断崖から飛び降りさせようとしたのだ。科学技術があればあればと花開いて我らの手に負えない化け物となる過程で、数十億もの人々が命を落とし——それどころか人類そのものが別の何かに変貌し、太陽系の全域に分散して、新たな血みどろの戦いに巻き込まれていった。核兵器による攻撃、バイオ兵器による疫病、ナノマシンの大量投入、人間精神のマス・アップロード——などなど、数限りない脅威が人類をほとんど一掃しかけた。

ところが、我々はまだ生き延びている。統制的な内惑星圏においてはハイパーコープを後ろ盾とする寡頭政体が、自由意思論が根強い外惑星圏においては集散主義体制のハビタット (人工居住区) や、部族社会、事件的な社会モデル共同体などがてんでんばらばらに散在するばかりではあるにせよだ。太陽系の涯<sup>はて</sup>にまで我々は到達したし、その外に広がる大宇宙にさえ足がかりを築いた。しかし、我らはもはや単なる“人間”ではない。それ以上の何かであると同時にまったく別種のものへと進化したのだ——言うなれば、トランスヒューマンとでも呼ぶべき存在へと。

## トランスヒューマニズム (超人類主義) とは?

トランスヒューマニズムは、“強化人間化”とほぼ同義の用語である。科学技術を用いて人体を心身両面で増強することを是とする知識人たちが起こした国際的な文化潮流を意味する言葉だ。その主張の一環として、老化、身体障害、病気、不慮の死などなどの厭わしい要素を人生から一掃するためには、近未来技術をも積極的に用いるべきだという言説もまた展開されている。そうした技術は遠からず現実となって指数関数的に目まぐるしく発達し、民主的なルールの下で誰もが利用できるようになるのだと、多くのトランスヒューマニストは口を揃える。そこでさらに遠くを見据えるのなら、現状の人類と、心身両面の能力が飛躍的に進歩して“ポストヒューマン”と呼ぶべき存在に一変するであろう未来人との間に横たわる過渡的な形態を論じるもの、それこそが、トランスヒューマニズムだという見方もまたできよう。

しかし、トランスヒューマニズムには多くの難問が内在することもまた確かだ。人間の定義とは何か？ 死の克服は何をもたらすのか？ 人の心がソフトウェアであるなら、どこまでのプログラミングが許されるのか？ 機械や動物をも知性化できるなら、そのことに我々はどんな責任を負うべきなのか？ 自分自身の複製が可能であるなら、どこまでが“自分”で、どこからが他人なのか？ そうした先進技術は民衆をどれほど抑圧し、もしくは解放しうるのか？ 我らの社会、我らの文化、そして各々の人生を、それら先進技術はいかほど変えてしまうのか？——などなど、めくるめくまでに難題は尽きない。

心はソフトウェア。プログラムせよ。  
肉体は入れ物に過ぎない。交換せよ。  
死は単なる病気だ。治療せよ。  
絶滅の危機が近付いている。立ち向かえ。

# 『エクリプス・フェイス』の世界

## ハイパーコープ

数あるハイパーコーポのほんの一部ではあるが、以下にいくつかを紹介しよう。

## コメックス

コメックス・エクスプレスは宅配、配送、星間物流、宇宙船輸送を専門とする企業だ。太陽系内に存在するトランスヒューマンのハビタットのほぼすべてで、しばしば現地の下請け業者を通じてサービスを提供している。太陽系の全域にわたって要所要所の軌道に遠心力式射出施設を配備した物流ハブを構築しているほか、大規模な宇宙貨物船団や宅配ドローン群も擁している。

## ダイレクト・アクション

この政治からは距離を置く民間軍事会社は、“大破壊”以前からあるいくつかの傭兵団の生き残りが設立したもので、自治政府をもつハビタットや、ハイパーコープの施設に対して警備や保安のサービスを提供している。

## エコロジーン

エコロジーン社は遺伝子工学を応用したバイオ建築や環境ナノテク技術を専門とし、エコロジーをつねに重視している。

## ファー・ジン 発動

発動は、ネットワークの構築と社会的責任の共有を社是とする採鉱とエネルギー生産の独占企業だ。

## ゲートキーパー・コーポレーション

複数の科学研究機関とその後援企業が合併することで生まれたこのハイパーコープは、土星の衛星であるパンドラの地表にあるというワームホール・ゲートウェイの謎を解読してその通路を開いたことで名を高めた。この国際企業連合は現在では、パンドラ・ゲートをくぐり抜けて探検に繰り出す“ゲート・クラッシャー”たちを資金面で援助している。

## スキンセティック

ネオジェネシス、すなわち、新たな生命体の創出や、バイオ技術による生体の急激かつ広範な改変を専門とするこの無政府資本主義企業は、クローン技術、遺伝子工学、義体設計で限界に挑みつづけている。

## ソラリス

ソラリスは太陽系を代表する金融投資系ハイパーコープで、各種保険、先物取引、情報仲介業務、ハイリスク投資商品などを取り扱っている。ソラリスはヴァーチャル企業であり、行員ひとりひとりがワンマン・オフィスとして機能している。 ■

## 『エクリプス・フェイス』に登場する勢力

“大破壊”ほどの激動を経験したなら、生き残ったトランスヒューマンたちは太陽系内の人口を回復し、子孫に繁栄をもたらそうと一致団結してひたむきに努力するに違いないと考えるのは当然のことだ。“大破壊”以後の政界人、財界人、社会運動家の中には嘘偽りなしに利他や博愛の精神を行動原理としている集団もあるにはあるが、トランスヒューマンのコロニーやハビタットが太陽系の全域にわたって物理的に孤立して点在し、情報体は肉体を失って難民と化し、メッシュには無数のミーム（文化的な遺伝子）やイデオロギーが遍在するという状況下において、千差万別な人生観や達成目標、政治理念がばらばらに進展することとあいなった。その結果こんにちのトランスヒューマンは、手を取り合ってよりよき未来へと共に進むという理想像から、これ以上ないまでに離れてしまっている。

## ハイパーコープ

ハイパーコープとは、地球における旧来の多国籍企業から発展し、かつての地球で国家や政府に対して陰に陽に強い影響力を及ぼしていた巨大企業体を取って代わった存在である。団体の大きな多国籍企業のいくつかは、よりスリムかつ柔軟で、未来志向を掲げ、小回りもきくハイパーコープとして今でも有名な企業体へと変貌したのは“大破壊”より前のことであり、そうして生まれ変わったことのお陰で、貪欲なサメのごときそれらの巨大企業はトランスヒューマンに投げかけられた困難な挑戦に順応し、目まぐるしく変化する経済の潮流を素速くかき分けて、巧みに流れに乗ることができるようになったのである。

たいていのハイパーコープは分散型で物理的な資産に依存しない法人であり、完全なヴァーチャル企業の場合すらあって、製品やサービスの開発、生産、販売を、系列子会社や協力企業が分担する複雑なシステムに頼ることで成立している。ほぼ完全なオートメーションや、先進的ロボット工学、義体技術、メッシュのネットワーク網、さらには多種多様な機械装置類などのお陰で、ハイパーコープは作業員や工場労働者を大量に雇い入れる必要を免れるようになり、管理業務も多くはヴァーチャルな環境や模擬オフィスで実行されている。肉体労働の必要性は大幅に減少して、ハビタット（人工居住区）の建設や深宇宙鉱山での採掘くらいに限られており、しかもそれとて難民と化した溢れんばかりの情報体が、肉体を取りもどすために躍起になっていることに大いに助けられているわけである。

## 政治における派閥の数々

トランスヒューマンの社会、文化、イデオロギーは多様性に富んでいる。おまけに彼らは太陽系の全域に点在するハビタットで孤立している。そうしたことからあちこちで、理想においても制度においても等しく多様性の宝庫である、きわめて広範なイデオロギーや派閥が乱立する事態となった。もちろん、賛否両論にさらされる政体が一夜にして安定したり、反論を浴びずに発展したりすることは考えがたい。さらに、長年かかって定着したイデオロギーにしたところで、いずれは求心力が希薄になるものだし、何らかの外的要因や、目的遂行のためなら手段を選ばない政治集団などの影響を受けて腐敗することさえ珍しくもない。そうした経年劣化を免れることは、まずもって不可能である。

# 『エクリプス・フェイス』の年表

以下の年表は、<sup>ザ・フォー</sup>“大破壊”を基準年とするものである。

BF = 大破壊紀元前。AF = 大破壊紀元後。  
(例: BF10 は、大破壊紀元前 10 年を意味する)

## BF60 以前

- ・急激な気候変動やエネルギーの枯渇、地政学的な不安定化などにより、地球が危機に見舞われる。
- ・人類が宇宙に初めて進出し、ラグランジュ点、月、火星にステーションを建設。さらに、ロボットを用いて太陽系全域の探検にも取りかかる。
- ・軌道エレベーターの建設工事が始まる。
- ・医療技術の発達によって健康状態が改善し、臓器修復術も進歩を遂げる。そして富裕層は遺伝子修復や遺伝子組み換えペットに熱を上げるようになる。
- ・コンピュータの知的能力が人間の脳に追いつき、追い越すまでになる。真の意味での AI はまだ開発されていない。
- ・ロボットが広範に普及し、多くの分野で人間に取って代わり、あるいは仕事そのものの存在意義を失わせる。
- ・先進国において高速ワイヤレス・ネットワークが拡大する。

## BF60 ~ 40

- ・地球上で巨大規模の地形操作がいくつも試みられ、それが解消するのと同じくらいの新たな問題を引き起こす。
- ・月と火星の主要なコロニー群がこの頃に成立する。水星、金星、アステロイド・ベルトには前哨基地が築かれる。そして探検家たちは冥王星に到達する。
- ・地球で初の軌道エレベーターが完成する。他にも 2 基が建設中。宇宙の交通量が飛躍的に増大する。
- ・マス・ドライバーが月に建設される。
- ・火星のテラフォーミングが開始される。
- ・核融合電力技術が発達し、発電所が建設される。
- ・遺伝子増強、遺伝子セラピー（長寿を目的とする）、サイバネティック・インプラントなどが、裕福で影響力も強い人々には利用可能になる。
- ・初期タイプの非自立型 AI が秘密裏に開発され、さまざま研究やネット戦争に利用されるようになる。
- ・経験再生 (XP) 技術が開発され、一般の使用に供されるようになる。

## BF40 ~ 20

- ・暴力と紛争が地球を荒廃させる。一部の争いは地球上には留まらずに宇宙にまで波及する。
- ・“アルゴノーツ” がハイパーコープから脱退し、資源をあちこちの自治ハビタットに持

ち込む。

- ・宇宙への進出が進んだことで技術開発の妨げとなる法的／倫理的障壁への抜け道が見つかり、直接的な人体実験も頻繁に行なわれるようになる。
- ・人間のクローン化が実現し、一部地域で利用可能になる。
- ・初期のトランスヒューマン種族群が開発される。
- ・イルカやチンパンジーが初めて知性化される。
- ・核融合ドライブによる宇宙船が広く一般に使われ始める。
- ・火星の植民とテラフォーミングが大規模に進行中。小惑星帯とタイタンへの入植が始まる。太陽系の全域に宇宙ステーションが設置される。
- ・飢えた大衆がみずから志願してハイパーコープの宇宙開発計画における奴隷的な年季契約に身を投じるようになる。
- ・強化現実 (AR) が普及しはじめる。
- ・既存ネットワークの大半が自己修復方式のメッシュ・ネットワークに生まれ変わる。
- ・個人支援用の各種 AI (ミュージ) が普及しはじめる。

## BF20 ~ 0

- ・地球の窮状は相変わらずだが、急激な技術の進歩によっていくつかの興味深い成果が現れる。
- ・人類の進出は太陽系の全域に及び、カイパー・ベルトにすら到達する。
- ・トランスヒューマン種族はもはや珍しくもなくなる。
- ・ナノテクによる万能合成機が利用可能になるが、エリート層や権力者たちはそれを厳しく規制し、用心深く管理する。
- ・記憶や意識のアップロードとデジタル・エミュレーションが可能になる。
- ・より多くの動物種 (ゴリラ、オランウータン、タコ、カラス、オウム) が知性化されるようになる。
- ・反対意見もあるなかで、ポッドが広く一般に用いられるようになる。

## <sup>ザ・フォー</sup>“大破壊”

- ・ティターンズが、高レベル分散型のネットワーク実験機器からシード AI へと進化する。そして最初の数日間はなんら疑われもせぬままとなる。ティターンズは知覚力、知識、そして力を飛躍的に増大させていき、地球上でも、そして太陽系の周囲においてもメッシュへの侵入を果たす。
- ・地球上のライバル国家同士がネット上でお互いを大々的に攻撃しあい、数多くの紛争を引き起こす。それらのネット攻撃は、後になってからティターンズの仕業だったことにされる。
- ・地球国家間の緊張関係が高まりつづけ、ついには公然たる敵対、そして戦争へとエス

カレートする。

- ・ティターンズが正面切つての攻撃を開始したことで、とてつもない規模のネットワークが勃発し、主要システムがいくつもクラッシュする。その際ティターンズは、自律型戦争兵器をも投入した。
- ・戦争はたちまち手に負えないものとなる。核兵器、生物兵器、化学兵器、デジタル兵器、ナノテク兵器が投入されたら、あらゆる陣営から報告が上がる。
- ・ティターンズが、人間精神の大量かつ強制的なアップロードに取りかかる。
- ・ティターンズによる攻撃が地球から太陽系以外の領域へと拡大し、とりわけ月と火星では激しいものとなる。数多くのハビタットも陥落する。
- ・ティターンズが突如として太陽系から、数百万ものアップロードされた精神とともに姿を消す。
- ・地球は破壊の限りを尽くされ、放射能汚染地域や不毛地帯がまだらに広がるばかりとなり、廃墟がぼつりぼつりと残るばかりの荒れ野には、ナノスウォームの雲、うなりを上げる戦争兵器、その他得体の知れないもの、物陰に潜むものなどが散在することとなる。

## AF 0 ~ 10

- ・土星の月パンドラで、ティターンズの残したワームホール・ゲートウェイが見つかる。またそれ以外にも、バルカン群小惑星 (訳注: バルカンは 19 世紀、水星の内側にあるとされた架空の小惑星。ここにバルカン・リングと呼ばれるいくつかの小惑星が発見されている)、火星、天王星、カイパー・ベルトの 4 箇所でゲートウェイが見つかる。それらはまとめて“パンドラ・ゲート”と呼ばれるようになる。
- ・パンドラ・ゲートを通じて太陽系外への探検隊が送られる。数多くの太陽系外惑星に植民地が築かれる。
- ・“代理人”と呼ばれる異星人とのファースト・<sup>フューチャー</sup>コンタクトが太陽系を揺るがす。“代理人”たちは他の異星文明の使節であると主張し、太陽系外の生命体についてはほとんど何の情報も明かぬままに、シード AI からもパンドラ・ゲートからも退くようにトランスヒューマンを警告する。
- ・促成栽培クローンと時間加速した強化現実を併用して一世代分の子供たちを素早く成長させようとした試みが無惨な失敗となり、ほとんどの子供が死ぬか発狂する結果となる。<sup>ロスト・ジェネレーション</sup>“失われた世代”と呼ばれる生き残りたちは、嫌悪と憐れみの混じった目で見られるようになる。

## AF 10

- ・現在。

# ファイアウォールへようこそ



[メッセージ受信。発信者：不明]  
[量子解析：傍受非検出]  
[複合化完了]



ようこそ、

君の身元書類と経歴は三重のチェックをくぐり、センチネル（前哨）としての考査に通った。友よ、ファイアウォールに君を歓迎する。

新人向けの説明をしておく、ファイアウォールとは、トランスヒューマンを内憂外患から守りぬくことに専心し、我々人類を種として存続させることを使命とする私的機関だ。<sup>ザ・フォール</sup>“大破壊”によって我々は、難局を生き延びてなおも興隆をみるだけの力量を自分たちが欠いている可能性にせいぜい肝を冷やしたことであるように、我々の注意力というものは、あきれるほどに薄くかつ移ろいやすい。実用レベルでのほぼ完全な不死を実現したことも空しく、我々は今なお、人類を絶滅させかねない数多くの危険にさらされているのだ。そうした危険としてまず挙げられるのは、我々特有の派閥争いや軋轢<sup>あつれき</sup>に起因するものだ。高度なテクノロジーがどこでも利用でき、悪しき者たちの手にそれが渡れば広域破壊と大量殺戮をもたらしかねないこともまた、その種の危険に拍車をかけている。またそれ以外の危険として、我々の近視眼ぶりが差し招くものもある。自分たちとその周辺環境が瀕している危機を見逃し、わざわざ危ういところに身をおくことが我らの常であるからだ。さらに、我々の創造物が反逆することによる危険というものもある。これは、ティターズスの例

をみれば明らかである。くわえて、異星の知的生命体から危険がもたらされることもありえる。その動機はおろか、存在すらが我々には未知である異星人のことだ。その他にもまた何らかの存在が、まったくの偶然からか、あるいはこの宇宙の因果関係の気まぐれによってか、危険を及ぼすということもありえるが、それに対して我々は塵芥のごときものではない。

そうした危険を認識し、分析し、それに対処するのがファイアウォールだ。我々全員がボランティアだ。トランスヒューマンの絶滅を回避するために、誰もが命を懸けているのだ。

ファイアウォールは<sup>ザ・フォール</sup>“大破壊”以前からも、さまざまな名称や偽装の偽装の元に存在してきた。あの惨事にもなう大激動に引き続いて、似通った目的意識を持つ数多くの組織が一致団結し、我々人類を取り巻く状況を調べ、最悪の事態に備えようとした。そして今、我々はひとつの旗印の下で行動している。

ちなみに、我々が私的機関であることにはふたつの理由がある。第一の理由は、秘密の組織であり続けることで、我々の存在と行動能力が守られるという事情だ。敵に知られる内容が少なければ少ないほど、より効果的に敵に対処できるのだ。また、ある種の当局機関が、自分たちの縄張りを荒らすものとして、我々のような組織に敵意をむき出しにすることも考えられる。我々の存在にうすうす気づいている当局機関とてあるかもしれないが、作戦行動や目標達

成の妨げになりかねない法律や司法の障壁は、ことごとく避けて通るのが我々のやり方だ。さて第二の理由は、我々が任務によって明るみにだす情報の中には、悪しき者たちの手に渡れば危険であるだけでなく、世間一般の知るところとなれば大規模なパニックを引き起こしかねないものもあるという事情だ。場合によっては、任務によって得た情報そのものが問題の種となることもある。秘密を保ち、作戦任務を極力絞り込むことによって、我々はある種のリスクをあらかじめ回避しているのだ。

ファイアウォールは分散型で、個人対個人の関係を軸とする組織だ。成員の上下関係は最小限にしか存在せず、行動の責めを負うのは、自分自身に対してのみだ。独自のノード構造をとっているお陰で、組織の秘密と構成員の安全を犠牲にすることなく、リソースや才能を共有できるようになっているのだ。

君に誘いの手が伸びたのは、君の知識、才能、技能のいずれかが優れていたか、あるいは何らかの機密データに君が接触したためか、もしくはその両方によるものだ。我々が目標を達成することに寄与する意欲を、君は示した。我々の生命や存在が——さらには、トランスヒューマンの未来までが——君の手腕にかかっているのだ。

それでは、未来に乾杯——我々皆が生き長らえて、それを目の当たりにできますことを。

[メッセージ終了]

[このメッセージは自己消去されました]

## 翻訳部分に関するクレジット

このファイルは Post Human Studio の『Eclipse Phase Quick Start Rule』および『Eclipse Phase Core Rulebook』を一部翻訳したものである。『Eclipse Phase Quick Start Rule』は、『Eclipse Phase Core Rulebook』から抜粋編集されたものであり、同書のデザインおよび執筆は Lars Blumenstein、Rob Boyle、Brian Cross、Jack Graham、John Snead の各人が担当し、Randall N. Bills が追加記事を担当した。編集およびディベロップ：Randall N. Bills、Rob Boyle  
アート・ディレクション：Rob Boyle、Brent Evans  
グラフィック・デザインおよびレイアウト：Adam Jury  
校正：Phil Bordelon、Melissa Rapp、Zak Strassberg  
日本語翻訳：待兼音二郎（Ottojiro MACHIKANE）  
日本語レイアウト：八重樫尚史（Naofumi Yaegashi）

該当箇所を利用した『Eclipse Phase Quick Start Rule』は Posthuman Studios による 1.2 版です。

ご連絡は、[info@posthumanstudios.com](mailto:info@posthumanstudios.com)  
<http://eclipsephase.com> のサイト経由、もしくはご愛用の検索エンジンや SNS などでの “Eclipse Phase” ないし “Posthuman Studios” で検索してください。



クリエイティブ・コモンズ・ライセンス；  
一部コンテンツについては  
無断複写・転載を禁じます。

Eclipse Phase は、Posthuman Studios  
LLC の登録商標です。

本製品はクリエイティブ・コモンズ  
表示 - 非営利 - 継承 3.0 Unported  
ライセンスのもとに発行されています。  
ライセンスの詳細については、以下をご覧ください：  
<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/3.0/>

（どういうことかと言いますと、あなたは本製品内の文章やアートワークを自由にコピー、共有、改変することができます。ただしその際、以下の各条件に従わねばなりません：1) 非商用目的に限る；2) 著作権が Posthuman Studios に属することを表示する；3) あらゆる派生物を、あなたは同じライセンス条件でライセンスしなければならぬ。このライセンスに関する詳細や、クレジットの記載方法、ライセンス内容の更新 / 変更については、以下をご覧ください：  
<http://eclipsephase.com/cclicense>

# これだけは頭に叩き込んでおけ



[メッセージ受信。発信者：不明]  
[量子解析：傍受非検出]  
[複合化完了]



まあ座れ。飲みたきや自分で適当にやれ。たつたいま読んだAI自動作成のクズ文言のことは全部忘れろ。ホントのことを話してやるから。

あんた、自分がどんな組織に引きずり込まれたのか、それが知りたくてうずうずしてんだよな。トランスヒューマンの絶滅を食い止めるの我々だけだ……とかなんとかの組織理念を長々と聞かされたところかもしれんな。それとも、自分たちは何の権限もない厄介事に首を突っ込むはみ出し者の集団で、そんな勇み足がわざわざいして民衆から犠牲者をだしてしまうこともある……てな感じのぶっちゃけ話を内密に打ち明けられたところか。そんなこんなで、詮索心の固まりになってんじゃないのか。あんた、ひょっとすると自警団タイプの性格で、立派な大義名分に血を捧げることが望んでるのか。でもさ、その大義名分が嘘偽りだったら、いったいどうする？ それともあんた、ひょっとしてどこかの陰謀団の手先とかで、ファイアウォールがどんな秘密を宝箱に溜め込んでるのかに興味津々ってところなのかい。ところがどっこい、ひとたびその秘密が明らかになれば、俺たち全員が正気を保つためにみずからに言い聞かせてる嘘方便が一気に崩れ去るとしたら、あんたどうするよ？

ファイアウォールについてあんたがこれまでに聞きしたすべてのことは、プラスの意見も、マイナスの評価も、かなりホントだと思っ正しい。俺たちは天使じゃないんだ。ティターンズが人間精神を初めて強制的にアップロードしたときに、俺たち人類の理念は輝きを失った。そして今、あんたは自問自答をくり返しているはずだ……どんなクソ組織に自分は加わっちゃったんだらう、つとか。俺も初めはそうだったからさ。

答えをいうと、ファイアウォールとは数多くの要素からなるものだ。その大半は善なるものだが、ひどく醜怪で耐えがたいものも少なくはないから、何もかもを忘れてたくて頭にズドンと銃弾を撃ち込み、ずいぶん早いがバックアップに逃げ込みたい、なんて考えに立ち至ることになるかもしれない。だがな、もしもあんたが正義の味方のヒーローになることを夢見てでもいるんだらう、とつとつそんな考えは捨てちまいな。伝染性のナノウィルスを身に忍ばせているガキをエアロックから放り出すことで、ヒーロー気分が味わえるなんてことはないから。異星生命体に出くわしてズボンに糞を漏らしでもしようものなら、自分が勇敢だなんてこれっぽっちも思えんだらうし。さらに言うと、数十、数百、いや、数千もの人命がとばっちり犠牲になる要請をだすは

めにでもなってみろ。たとえそれで数百万人の命が救われるのだとしても、はたして自分には人間の資格があるのか、って気がしてくるもんだぜ。

だとしたら、そんなゴタゴタにいったい誰がわざわざ関わり合いになったりする？ でもな、それはやらなきゃならないことなんだ。人類の存続がかかっているんだよ。なかには利他主義に突き動かされて、トランスヒューマンを滅亡から守ることが使命なんだと息巻く手合いもいる。だがな、マジなところは、てめえの首を守るためでもあるんだ。まあ、責任を引き受けることにためらいを感じて、当局機関を自称するどこかの組織に始末を任せたくなるってこともあるだろうぜ。でもよ、もしもアナキストどもの行動に道義にかなう部分が少しでもあろうもんなら、権力の座にある連中ほど当てにならないものはないんだぜ。しかも、そいつら自身が厄介事に一枚噛んでるってこともたびたびだからな。そこで、一致協力して事に当たるためにファイアウォールが存在する。俺たちはアンダーグラウンドな組織ではあるが、オープン・ソースな集団でもある。共通の目的を実現するために、情報やリソースを共有しているんだ。俺たちは任務ごとにネットワーク化された細胞に組織され、いわゆる<sup>スマート・モブ</sup>スタイルで行動する。誰かひとりに権力が集中することは許さないしくみになっているわけだ。作戦参加者全員が平等に発言力を持っている。警戒警備なんかも自分たちでやる。俺たちはありとあらゆる勢力からの寄せ集めで、経歴も各人各様だが、敵はひとつで、俺たち全員がその敵に打ち勝つために戦っている。そうする以外に方法はないんだ。

あんた、フェルミのパラドックスって聞いたことなるか？ 宇宙はこれほど広大だということに、俺たち以外に生命体が存在する兆候があまりにも乏しいことの矛盾を問うものだ。たしかに俺たちは<sup>フロッガー</sup>と遭遇したし、その他にも異星生物が存在する証拠をつかんでいるから、この銀河系の近くにだって知的生命体がうようよいていそうなものだ……ところが、そうじゃないんだ。

どうしてだか教えてやるよ。宇宙は、まったくもってフェアなものじゃないってことさ。たとえトランスヒューマンが絶滅しようと、銀河系はそのことに気づきすらしないだらうさ。地球をみるがいい。地球という惑星はまだ存在し、生命を支えてくれている。俺たちがここまでひどいザマになってるってのにだ。まったく、現実ってのは思いやりのかけらもないくでなしだよ。永遠の生命だとかなんとかのユートピア的なくだらん夢想はぜんぶ忘れろ。あと一年生き延びただけで、俺たちはラッキーだと思わなきゃならん。俺たちは科学技術が発達させたせいで、大量破壊兵器が行き

渡る事態を引き起こしちゃったわけだが、それでも俺たちはまだ種として若く、同族内のくだらん対立を乗り越えることすらまともにできやしない。もしもあんたが、失敗の事後検討として本気で宇宙を探りたいと思っているなら、よっぽど根を詰めてかかることだな。生き延びることは俺たちの権利じゃなく、特権なんだから。

ファイアウォールと契約を結んだ時点で、あんたは呼び出しがあれば駆けつけにゃならん立場になった。あんたの近所で何か厄介事が起きたり、あんたがまたとない適役だったりする場合には、お呼びがかかるって寸法だ。そしたらあんたは何をやってようがすぐに取りやめて、その他一切切も後回しにしなきゃならん。まるで、その任務にあんたの生活がかかってでもいる——じっさい、そうかもしれないが——みたいにな。任務を帯びて行動している際——俺たちの言い方では「医者に行っている」ってことになるが——あんたの細胞には勝手気ままに行動することが認められる。ファイアウォールのネットワークに後方支援をしてもらうこともできるが、リソースは足りないモンと相場が決まってるから、いつでも俺たちに尻ぬぐいしてもらえるなんて思うんじゃないぞ。裏から手を回すために他のセンチネルたちにお呼びがかかるってなこともありうるわけだが、そうするたびにセンチネルの存在が明るみにでる恐れも生じるわけで、事態をややこしくしないために、そいつの足取りを俺たちが消して回らなきゃならなくもなる。だから、人に頼らず自力でやり抜くことが鍵だぞ。

最後にもうひとつ——俺たちには敵がいるってことを、絶対に、何があろうと忘れるな。敵といっても、ハビタットを核で攻撃することで政治声明を発しようとするトチ狂った輩や、バイオ戦争による疫病を人類すべてへの戒めだと考えるネオ・ラッドライト（訳注：技術革新に反対する人々）どものことを言ってるんじゃない。ファイアウォールの存在を知り、それを脅威だと考えるあれこれの機関のことを言ってるんだ。そいつらからセンチネルのレットルを貼られたら運の尽きで、あんたの残り日数のカウントダウンが始まるってわけさ。たぶん、バックアップも例外じゃないぜ。ま、背中にも目をつけておけてことだ。

俺の口から言えるのはこれぐらいだ。できうる限りに嘘偽りなく、ホントの話をしたつもりだよ。とにかく、秘密のクラブハウスへようこそ、新しい戦友よ。ただ、これだけは忘れるな——死もまた、この仕事では日常の一部だということ。

[メッセージ終了]

[このメッセージは自己消去されました]